ヨーロッパ基層文化の学際的研究部門

（2013～2017 年度）

日本人は欧米の文明と出会って以来、古代ギリシア・ローマ、中世、ルネサンスのヨーロッパ文化について多大な関心をもってきた。これらのヨーロッパの基層を形成する文化に対し、われわれは自分たちの基層文化であるかのように大きな関心をもち、これまで多くの研究成果を上げてきた。なぜ日本人が、古代ギリシア・ローマ、中世、ルネサンスの文化を身近なものと感じ、それに魅惑されてきたのかといえば、そこに日本文化とうわべは違うように見えても、何か芯の部分で共通するものを見出すからであろう。西欧の騎士道と日本の武士道との間、西欧と日本の封建制社会との間には比較可能な類似点がある。またヨーロッパ中世のロマネスク芸術には日本の仏教芸術に通じる素朴な美が感じられ、安土・桃山時代の絢爛なる芸術にはヨーロッパのルネサンス芸術に通じるものを見出すことができる。

しかしそれ以上に、われわれのヨーロッパ基層文化への関心には、その背景として日本人が政治、経済、社会のすべての側面で西洋文明を摂取し近代化を成し遂げた事実がある。近代化とともに日本人は、西洋文明が根ざす古代ギリシア・ローマ、中世、ルネサンスの文化を否応なしに自分たちの文化の根源の一つとして受容した。われわれにとり、ヨーロッパの基層文化を学び研究することは、日本人が模倣し同化してきた文明の根幹を知ること、第二の故郷の文化を知ることになったのである。そして現在、日本だけでなく世界の多くの地域がヨーロッパで形成された文明を受容して発展してきた状況をみれば、ヨーロッパの基層文化を研究することは、欧米の社会や文化の根源を知ることのみならず、現代世界が共有する文化の基盤を知ることにもつながるといえよう。

本研究部門「ヨーロッパ基層文化の学際的研究」は、このような問題意識に立ちながら、ヨーロッパの古代ギリシア・ローマ、中世、ルネサンスの時期に形成された文化の諸相を一つの学問分野からだけではなく歴史学、美術史学、哲学、文学、西洋古典学、宗教学などの様々な分野から領域横断的に考察し解明していくことを目的とする。

具体的な活動としては、様々な専門分野の研究者による共同研究の遂行、定期的な研究会やシンポジウムの開催、また外国人研究者を交えた国際的なシンポジウムの開催、紀要への論文掲載などを考えている。とくに本研究部門では、ヨーロッパの基層文化

を専門とする大学院生などの若手研究者を育成しその研究活動を支援していくことも重要な活動とする。そのために、研究会やシンポジウムにおいて、若手研究者が自身の研究成果を発表できる場を数多く作っていきたい。

メンバー（2017 年度活動終了時）

甚野　尚志（代表者）
井上　文則
井内　敏夫
岩田　圭一
瀬戸　直彦
田島　照久
藤井　明彦
冬木　ひろみ
益田　朋幸
宮城　徳也